

目を隠す。

但し、此四五人の中で、一人手品師の味方が居るのです。夫は味方だといふことを誰にも知らさないで置かねばなりません。

手品師が見ないの中に、先づ誰か、させるの吸口に觸つたとする、よしと相圖すると、手品師は、此方向いて、一生懸命に嗅き始める、而し勿論、幾ら嗅いだつて、分る筈がないのです。そこで、其四五人の中の味方を、側目で見ると、其人が、若し今吸口を觸つたのであると、自分の持つて居たもの、例令ば鉛筆でも何でもよい、夫を何氣なしに口にくわへて相圖をする。若し、真中だつたら、鉛筆の真中をいじくつて居る、若しがなくびであつたら、鉛筆のけづつた方をいじくつて居るそこで、手品師は、鹿爪らしく、しきりに、させ

るのアツチコツチを嗅いで見ながら、そ一つと、其味方の相圖を見て、若し味方が、尖の方をいじつて居ると、あゝ分つた、がらくびが臭ふ様だ、がらくびだゝといつて嗅き當てるのです。

言つて見れば、何でもない様ですが、知らない人は、吃度不思議に思ひます、皆さん、お友だちを集めた時、一つ慰みにやつてごらん下さいまし。

軍服の色

日本の軍人の服は、今度の戦争には、皆薄茶色に染めた、カーキ色といふのになつて居るのは、皆さん御存知でしょう、カーキ色といふのは、アフリカの南に在るカーキ河といふ河の名から來たので、先年、英吉利とポーアと戦争した時ポーア人は、此河の泥で染めた軍服を着た。夫が即

ちカーキ色の軍服であつた。所で、この色は、三千メートルも離れると、丸で、空気の色と同じ様に見えて、一向見分けがつかなくなる。そこでさすがの英軍も之には、殆んど閉口したのであつたが、終には英軍の方でも、之に倣つて、植物質の染料を使つて、其軍服を、皆同様な薄黄色にして仕舞つたのだといふことです。

お多福會 (續)

林 天然

お多福共は達磨にすねられて、すつかり酔が醒めてしまひました、そこで唯其儘解散するのも餘り興がない、天氣の善いのを幸ひ、一つ運動會をやらうと一決しました。

『マア何がよいでしよー？』

『驅ツくら！』

『それが宜いでしよー』

一同が廣々とした庭へ出た、一町半許り向へ、赤と白との旗二つたて、其赤旗を取るものには、鏡一個を、白旗を取るものには、白粉一箱を與へることに定め、やがて數十人のお多福が一行に併びました、丈や結髪や衣服や帯は、悉く違つて居るが額が狭いのと、頬が膨れ出て鼻が小さいのと、目が細くて耳が大きいのと、軀幹のデブ／＼肥満てる所は、皆一樣であります、用意整ふと、年老つたお多福が、『イチニーのサーン!!』と相圖をするのと、お多福共は驅けるがかけるが、もう一生懸命皆兩手を握つて胸へ當て、河豚の様に小さい口をすばめ、ブクリンと頬を膨らして、馳け出した、然し其走るのは極めて意氣地がない恰で水蝸鼠に逐